

(肝属郡根占町横別府字出口)

位置と環境

出口遺跡は町役場から東へ約7kmのところであり、横別府の火山灰台地上に位置している。この台地の南には辻岳・野首岳を主峰とする辻岳山塊が南西に延びる。

出口遺跡は、標高230～240mの谷添遺跡から南側へ馬の背状で南に延びる畑地にあり、約100mのところ、標高で約12m下がったところに位置している。

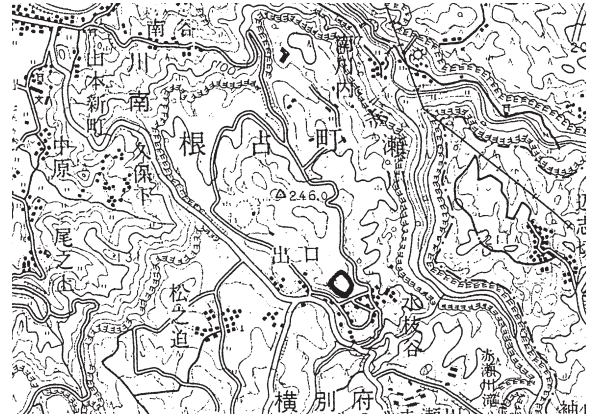
調査の経緯

遺跡は、九州農政局『国営総合農地開発事業肝属南部地区』の事業実施に伴い、工事計画区域内に土器の散布が確認され、町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、平成3年11月に確認調査を実施した。

この結果、関係者の協議により工事着手前に本調査を実施することとなり、平成10年に調査(1,595㎡)を実施した。

遺構と遺物**1 縄文時代晩期について**

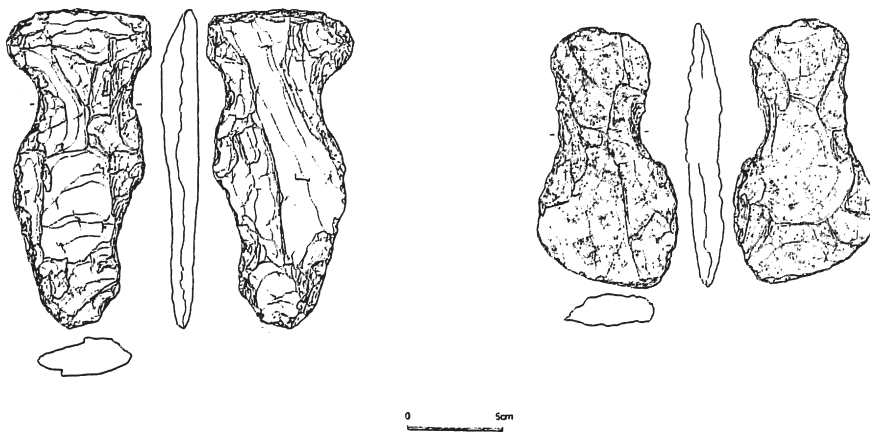
本遺跡からは刻目突帯文文化期の深鉢、鉢、浅鉢、丹塗磨研壺などの土器が出土した。全体の遺物出土量は少なく、かつ遺構に伴った出土ではないものの、これらは当時の器種構成を検討する上での好資料であるといえる。



第1図 出口遺跡の位置

特に、小形舟塗磨研壺は接合こそしなかったが、口縁部から底部付近まである程度器形を知り得る状態の資料が出土した。大隅半島中部域では初めての例である。この土器を含めた本遺跡全体の縄文時代晩期の土器相を鹿児島県内の例に求めると、曾於郡末吉町の上中段遺跡をあげることができる。上中段遺跡では多くの刻目突帯文土器とともに赤色顔料を塗彩した土器や打製土掘り具が出土している。また、同じ町内の貫見原遺跡の資料も出口遺跡と同時期あるいは次の段階と考えられる土器が出土している。刻目突帯文文化期の文化が本遺跡に伝播してくるルートを考える上で興味深い類似資料である。

大遺跡で多くの資料が出土したわけでもないが、このようなコンパクトな遺物の出土をみる遺跡の在り方も、一つの類型として貴重な情報であるといえよう。一通りの生活用具がそろっているが、遺構が検出されていないという点も大きな特徴である。



第2図 打製石斧実測図

2 弥生時代中期について

本遺跡からは弥生時代中期中葉の土器（壺形土器）が1個出土した。傾斜面に散在する形で約50点の土器片が出土した。この地に同時期の遺物は出土していない。想起させるのは隣接する谷添遺跡の存在である。出土地点から120mほど北側に谷添遺跡が立地している。しかも、弥生時代中期中葉から後葉にかけての遺物が出土しており、出口遺跡の壺を谷添遺跡の出土遺物の中に入れても何ら違和感がない。同じ集団の所有物であった可能性が高いのではと考えている。

特徴

出口遺跡からはいわゆる突帯文土器が少量ながらも比較的まとまって出土した。本遺跡の出土遺物は弥生時代早期に該当する。組織痕土器が存在する点では古い様相もみられるが、壺形土器が出現する点

や甕形土器の胴部屈曲部状態からは新しい様相も感じられ、全体として2時期にわたる様相として把握できるのかもしれない。注目されるのは打製石斧が比較的多いということである。いわゆる定形石器としては唯一の石器であった。これはまさに土掘り具で畑作を生業とする集団の遺跡ということになる。また、小型の丹塗磨研壺の在り方も今後検討しなくてはならない。とにかく、縄文から弥生へと変遷していく過程で、大隅半島における一様相を示す貴重な情報を得ることができたことは収穫であった。

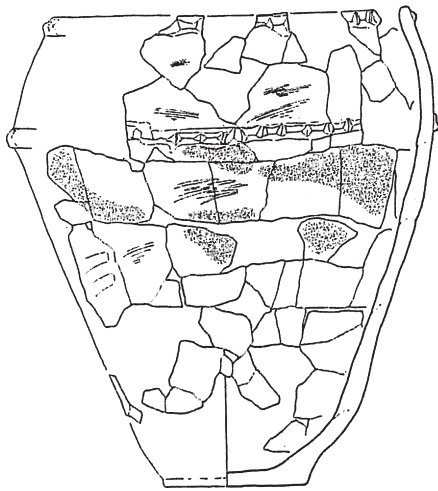
資料の所在

出土遺物は、根占町教育委員会に保管されている。

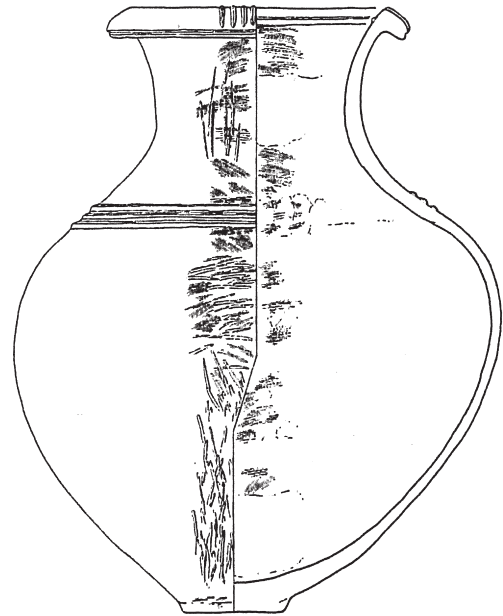
参考文献

根占町教育委員会2000「谷添遺跡・出口遺跡」『根占町埋蔵文化財報告書』10

(下大川司)



第3図 縄文土器実測図



第4図 弥生土器実測図

